

報告

<本校学生の教育実習の実態報告>

教育実習指導に関する全国規模での共通ガイドラインの必要性について

法政大学キャリアデザイン学部 兼任講師 福田 淑子

I はじめに

今日、学校や子どもたちを取り巻く社会問題を語る時に、評論家やマスコミは必ずと言っていいほど、「教員の質の低下」「教師の仕事に魅力がないので成り手がいない」「ブラック企業のような学校現場の労働実態」などというような定番の学校現場や教師批判を口にする。長年、教育現場にいる身としては、それがどうして起きたのか、ではいつの時代のどのような教師像が「質が高かった」のか、これまで財産として蓄積されてきた教育実践はいかなるものかが語られないことが残念だ。確かに、今日まで優れた教育者は数多くいたが、その財産が十分に生かされているとは思えない。教育行政は PISA の結果を横目で見つつ幾度も教育改革を重ねてきたが、明らかに「進化」したのは、ほかでもない「教育 IT 機器」の導入だけなのではないか。「利便性」の追及はとどまるどころがないが、さまざまな弊害も懸念される中、加速度的に性急に導入される IT 機器だけで閉塞している教育の現状を打破することができるのか、さらに子どもたちの心の危機を加速することはないのか、教師の仕事が本来的などころから外れてさらに多忙になることはないのか、時代の変化に対応しようと努力を重ねつつ、現場の教師は戦々恐々としている。今日の教育現場では何が起きているのか。実態はいかようなのか。現場を垣間見た本校の日本文学科の教育実習生の報告から探してみたい。

II 今年度の教育実習体験の報告から

1. 教育実習生の実習報告マニュアルについて

筆者は、今年度で 18 年目に入った文学部の教職資格取得希望者の学生のための「国語科教育法」という科目のほかに、3 年前からは教職課程の 3 年生のための「教育実習事前指導」と 4 年生のための「教職実践演習事後指導」という科目を担当することになった。内容は、来年度に教育実習に行くことを予定している 3 年生に、すでに実習指導を終了した 4 年生が「自らの教育実習の体験を伝える」ということを目的とした講座である。

前任者から引き継いだ一年目は、前年度 3 年生だっ

た時に 4 年生から受けた発表形式にのっかって、4 年生は 3 年生に教育現場での実習概要のほかに、そこで感じたこと、思ったことを自由に述べるという形で授業を展開してしまった。その結果、「感じたことを率直に伝える」4 年生の話の内容に面食らうことになった。4 年生のほぼ半数が、教職ではなく、すでに企業や役所に内定しているのだが、全国津々浦々で受けてきた中学校や高等学校での教育実習より、民間企業のインターンシップの方が「お客様のよう大切にされ」「仕事の魅力を語ってくれ」「企業の先輩の方が、人間的にも仕事の説明も感じがいい」。だから「ぜひインターンシップを上手に受けて、教育実習の時には、企業にも学校にも二股がばれないようにうまくこなすといい」という、なんとも世渡りのノウハウらしきことを強調して発表する学生も少なからずいたからだ。もちろん教職資格を取ったからといって、必ずしも教師にならなくてもいいわけだから、職業選択の幅を広げるためにも、企業研修と教職体験のメリット・デメリットを伝えることには意義があると思っの先輩の情のあるアドヴァイスである。

当世の各企業のインターンシップの現状については、流通業界、IT 業界、広告業界、金融関係、学習塾、受験産業など、文学部の学生を採用する市場はかなり広範で、好条件を売りにして学生を引き付けているという印象を与える報告であった。しかし、厚生労働省から出ている今年度の「新規学卒者における就職者・離職者集計」を見ると、事業所規模によって凸凹はあるが概ね大学卒が最初の就職先を 3 年以内で離職する割合はほぼ 30%である。また、入社前から、近いうちに転職したいと考えているという新入社員の割合は事業所の規模によって異なるが、20%余という調査結果もあるので、入社直後からすでに転職を考えている新入社員の数はかなりのものだといっている。とはいえ、3 年次後半から始まるインターンシップによって自分と企業とのマッチングに成功して、企業の内定を取った直後の学生には、将来の不安はあまり感じられないところを見ると、学生側の職業設計の傾向が一職種・一企業定着型ではなく、先々で転職していくことがすでに想定されている時代なのかもしれない。それも新自由主義経済での今日の社会状況や背景が関係してい

3. 教育実習の体験から、実習受け入れの側の問題点を考える

この表からわかるように、中学・高校を問わず、学校によって教壇実習のコマ数にかなりの差がみられる。また、教育実習期間が3週間というのがどの学校でもほぼ共通であるにもかかわらず、その際の指導教員の教科持ち時間数にはかなり開きがあるのがお分かりいただけるであろう。中学、高校の通常の教員の授業持ち時間数からしても、3週間で20数時間というのは、一日平均1~2時間程度ということである。そのような勤務条件はありえない。その理由は、例えばその期間に体育祭などの学校行事、もしくは指導教員の長期出張等によって、数日間授業が行われていないという状況だからである。A-1 B-9 B-13などの学生の受け入れ校がそのようなケースであった。例えば、修学旅行の引率で指導教員が不在の間、自習監督を10時間以上行っているものもいる。受け入れ側は、当然それを読み込んで実習生の担当を引き受けているという。学生が実習指導を受けた学校は、南は鹿児島から、北は宮城までの広範囲にわたる地域で、私立か公立かということでの顕著な格差は見られない。むしろ、地域性、指導者の個性や考え方、学校の特徴に多く依拠していると思われる。

次に、事例として具体的な報告を紹介する。B-9の学生は教壇実習が6時間、そのうち1時間は公開研究授業である。3週間のほとんどの時間を指導教員の授業見学に充てられている。教壇実習を十分にさせない理由として指導教員から「授業を荒らされたくない。私立学校なので、高いお金を払っている保護者に対して、あなたのような素人に授業をさせては申し訳が立たない」という説明を受けている。また、B-4の学生は、「思う通り自由にやっていいよ」ということで、指導教員の持ちコマのほとんどを当該学生の教壇実習に提供している。この学生に充てられた国語科の指導教員は3名で、その一人は病欠でほとんど実習生の指導ができず、ほかの2名も教壇実習に対して連携のある適切なアドバイスをなかったという報告をしている。実習生をどう指導するかは、指導教員の匙加減ひとつというのはありうることで、教育の指導はマニュアルを作ってその通りにするなどというような性質のものではない。が、ここまでくると教育実習生の受け入れの時期とプログラムに対しては最低のガイドライン作りが必要であることが分かる。

一方、母校であるというメリットとデメリットを考えて、デメリットを回避しようと、母校ではないところを教育実習の学校として希望した学生が37名中4名ほどいたが、おおむね充実した指導を受けている。それは、昨年の事後指導の4年生の報告などから、ど

うやら母校での教育実習には非生産的なリスクがあると考えて、それを回避しようという志のある学生なので、その積極性やモチベーションの高さからも当然とも言える。

4. ブラック企業並みの過剰労働

多くの学生は母校の中学や高校で実習を受け入れてもらう形をとっている。これまで提示した5つのケースは、かなり極端な例だが、母校での実習の対応である。顔見知りの教師が指導者であったり、まだ当時の指導教員が在籍しているということで、双方にゆるみや馴れ合いがあり、「頭が上がらない」ということも生じて指導教員の指示通りに動くしかなくなるのは想像に難くない。また、教師によって個人差のあるところだが、教科指導外の仕事で多忙な指導教員に当たれば、部活動や学校行事の準備などのアシスタント代わりにこき使われて、毎日下校時間が夜の9時を過ぎるといった報告もあった。さらに、中学校の事例だが、担任クラスの生徒全員が「一日の生活」を24時間こまめに記録するノートを配布されていて、教師はそのノートを、一日5人分回収して点検、日々の生活に乱れないか、自宅での学習時間、外遊び、食事の内容、就寝時間などをチェックしてアドバイスを書き込み、あくる日にそれを返却するという。実習生がそうした業務も経験したという報告があった。中学校ではこの「スケジュール手帳」はかなり配布されているという。この実習生は勤務時間内には点検できず、ノートを家に持ち帰って、生活のアドバイスの書き込みをしたということだ。放課後の私生活のチェックをクラス全員の生徒にするというのはどう考えても中学や高校の教師の仕事とは思えない。まさにブラック企業の無報酬残業さながらである。生徒の24時間の生活に眼を配り、指導するというのが当たり前と思うなら、家庭での教育も学校の教師に見張られ、指導を受け、点検されているということにならないか。子どもの生活指導もこのころの成長もなにもかも学校の教師に任せるのでは、地域や家庭の教育力が脆弱になり、親子のコミュニケーションがなくなり、限りなく家庭の教育は学校教育に侵食され、学校の教師は私的な時間も授業の研鑽をする時間もない。学校教育の根幹も家族の根っこも形骸化していくのではないか。

このような実態を聴きながら来年教育実習を予定している3年生がどのように感じているのか、以下に紹介する。

Ⅲ 教育実習生の実習報告から実習時の学生に内包する無気力感の原因を分析する

1. 4年生の報告に漂う無気力感に対する3年生のリアクション

以下は4年生から実習体験を聞いた3年生の12月4日のフィードバックシートの内容の一部である。

- ①教育実習は先輩が言うように「迷惑をかけている」という引け目で小さくなっているような態度で受けても意味がないと思う。積極的に自分の教育に対する理想や夢を実現するにはどうしたらいいか、また、どこが現実と異なるのか、疑問を持ったら現場の指導担当の教師に積極的に聞いていけばいいという先生のアドバイスはその通りだと思った。
- ②これだけ話を聞いてもまだまだ様々な実習があり、千差万別だと、毎回思う。自分の母校とは異なる仕組みの学校での実習体験で、生徒視点でも、教師視点でも異なるので、教育の場という狭い世界なのに、幅広い多様性があることに気が遠くなる。
- ③多くの実習校の指導教員が、本気で授業を意味あるものとして実習体験させたい、教師の仕事に夢を持ってほしいと考えているとは思えない。前向きに取り組み、積極的に学ぶとはどうしたらいいのか。
- ④なぜだか理解できないような理不尽な要求を（例えば、化粧を落とせ・トイレは教員用を使用するな・朝は教員が来る前に職員室の掃除をする・他の教員の授業を見学するのは迷惑になるから禁止・好きなようにやっていいよと言いながら、最後の日に、あてがはずれたという、など）だまって受け入れるのではなく、理にかなった合理的な行動をとりたいと思う。実習を受ける側の主体性というのは大切にしたいと思った。
- ⑤教育実習生のみみんなに感じられる現場での「無気力感」が気になる。なぜ、そろってそのような無気力感を持っているのだろうか。（以上3年生）

2. 「無気力感」に関する4年生の心理と現状分析など

以下は、それに対する12月11日の4年生のフィードバックシートからの抜粋である。

- ①実習報告を聴いていて、教壇実習が32コマというのは、やりすぎで無理がある。自分の体験からも、教壇実習は10~20コマ程度が最適だと考える。指導教員にリクエストを出してもよかったのではないかな。
- ②教育実習はコマ数が少ない方が集中できる。授業の質も上げられると思う。しかし6コマは少なすぎる。

希望を言うことができない雰囲気は分かるが、それではむなし。

- ③そもそも答えが一つの受験中心の授業を受けてきた自分たちには、実習の面倒をかける教師に「要求」や「希望」を伝えるなどという発想すらありえない。
- ④感性やセンスを磨き始めるのは中学・高校の時代であり、その時期を受験勉強にのみ費やすのか、あらゆるものに触れて考え、広範な価値観を養っていくのか、それはとても大切な選択の時期だと思う。
- ⑤意見を言わないというのは、相手の意見に反論するほど自分の意見に自信がないというのがある。その原因の根本には、他人と自分との比較の中に、自らの幸せを見出しているからだと思う。
- ⑥教育実習中に「あの実習生は非常にはきはきとして良い」と評価を受けた実習生の研究授業は、黒板にひたすらテキストの答えを書き写していただけだった。ここで、「堂々とする」とは何だろうかと考えてしまった。
- ⑦「生徒の発言を拾う」授業と、よく言われるが、その授業技術とはどのようなものかよくわからない。現場での指導もなかった。
- ⑧無気力の外側には「何々しておけば良い」そこから転じて「何々以上はしなくても良い」というような最低限の労力で、上質な安心を得たいという欲求があると考えられる。ここでの「最低限の労力」とは、外に向けての働きかけとはもはや言えず、自分自身を納得させるだけの、ただの言い訳になり果てていて、どこにもそのフラストレーションを向けられない、それが、自分の中にたまって、無気力につながっていくのではと思う。
- ⑨自己主張しない人は「楽な人」として嫌われることが少ないが、エスカレートすると何をしても、何を言っても大丈夫な人になる。一度ついた印象はなかなか変えられない。自分が傷つくことに耐えるというかたちでしか人との付き合い方がなくなってしまう。
- ⑩声を上げる大切さを、生徒に伝えるにはどうしたら良いのだろう。最近の若者が新しいことにチャレンジしようとしなないという話に似ていると思った。この場合はチャレンジしないのではなく、チャレンジできないというのが正確で、一度の失敗も許されない社会だからだ。一度の失敗が自分の人生を左右してしまう。だからチャレンジできないのだ。
- ⑪「それはだれのために、何のためにしていることか」初心に戻る、常になんのためにこれをするのか、必要なのかという原理原則に戻って考えるという先生の指示は、確かに最も合理的な指針だと思った。
- ⑫誰が見ても怒らない、自分が「いきがっている」と

思われない文章を書こうと自分や周りの生徒が意識していると感じるが、その意識の根底には周囲と波風を立てたくないという思いがある。しかし、その大前提として、他人と深く関われない、関わりたくないという考えがあるのではないか。その大前提があるから優先席などで声をかけない、譲らないという現象も起きるのだと思う。

- ⑬周囲と争うことを避け、自分より強いものに従う習慣は、今の日本社会において自分が傷つかずに生きていくために身に付けてきたものだと思う。今、所属している部活でも、「役員が言うことが全て」という風潮があるが、反論があっても誰も口には出さない。そうして何も言わないのは楽ではあるが、果たしてそれが自身のためになるのかは、疑問に思う。しかし現場では何も言う気が起きない。
- ⑭日本社会の結果や社会にはびこっている無力感の背景には、幼い頃から協調性という名のもとに、空気を読む事を押し付けられているというのがあるからではないか。他人に迷惑をかけてはいけないと言われて育ったということと、発言や振る舞いにスタンダードを求められ、そこから逸脱すれば、抹消されるのではないかという不安が、無力感の根底にある。このような「しこり」というようなものが人の心の底にあるからではないだろうか。
- ⑮無力感や生きづらさを抱きながらも、毎日を無難に送ろうとする日本人が多いように思う。中学校生活を通して、言いようのない無力感に襲われたことがある。しかし、今になって考えると、無力感とはいわば激しい被害者意識なのではないか。
- ⑯他者からの抑圧の末に、自らの思考を放棄することが、精神的自殺行為であると思うのだが、そこからいまだに立ち直れたとは言い難い。しかし、少しでも他者との関わりの中でよりよく生きていきたいと思う。
- ⑰思考し続けることと自らの意志を持つ努力をすることが、この閉塞感を打破する方法なのではないか。この無力感の小中高の教育から植えつけられているものだと思う。生徒が何かを希望し申し出たとき、例えば文化祭で模擬店をやりたい等と申し出たら、学校が頭ごなしに否定してきたら、もう何を言っても無駄だと思う無力感につながる。学校側の評価を気にしなければならない環境、内申書、指定校推薦なども無力感の土壌になると思う。
- ⑱学校時代、授業中に質問や反論もできないという環境だったという指摘があったが、本当にそうだったのだろうか。もう一度考えてみたら、今まで出会った先生はそんなに高圧的だったか。先生の対応や、答えを間違えることが怖いというよりは、責任が自

分に集中することが怖いだけなのではないかと思う。

- ⑲日本という国が、今ある程度、食うことに困らなくなったので、昔を生きた人たちの本当にひもじさを知っている人たちによって育てられた親世代から生まれた私たちの世代は、生きるということにあまり執着していないのではないか。今日の授業を聞いてそう思った。
- ⑳毎日、なんとなく流れるように流されるように生活している。目標を立てず、とにかく、日々安定していることが重要だ。あまり冒険はしない。そういった感覚のことを無気力というのであれば、私は確かにそうかもしれない。
- ㉑何もしなければ何も起こらないし、楽である。今、何かをするエネルギーすら持ち合わせていないのではないか。それより、今日の世相に、どこかで無気力が良いという価値観があるのではないだろうか。
- ㉒自分の周りを見ても、正直何か目標に向かって過ごしている人は多くないように思う。どこかに就職すればいいと思っているに違いない。
- ㉓「空気を読む」世界に日本はなっているが、誰もが「空気を読むこと」を前提に生きているわけではない。例えば、「優先席の前にいたけど、座っている人に気づいてもらえなかった」と何もせずあきらめてそこから離れるのでは、結局何もしていないのと同じだ。それで被害者のように振る舞う人が、現代では多いと私は感じるけれど、人として言語が通じるのであれば、声を出さなければならないし、声を出してコミュニケーションを図ることを、これから生きる子供に伝えていくことが必要だと思う。
- ㉔私立の学校は、おおむね有名大学への進学実績と修学旅行とクラブ活動が「売り」なので、文学の授業をするのは大変だと思う。保護者も塾のような授業を求めている気がする。そこで、本来の「考える授業」や「掘り下げる読み」や「創造的な読みの指導」などできるのだろうか。しかし、この教材の分析に時間をかけず、読みの多様性を考えず、国語の授業を流れ作業のように短時間で仕上げる教材の扱いで、PISAの成績は、本当に上がったのだろうか。(→日本人の読解力の成績がまた下がったという PISA で出題された文章読解問題だが、翻訳された問題そのものに欠陥があったのではないか。読解力の問題は世界共通で日本語に翻訳されたものが出題されたと言う。しかしながらこの日本語訳が誤訳とまではいなくても、あまり好ましいものではなかったと言うことだ。(東京大学大学院人文社会系研究科・文学部英文学の阿部公彦さんの Twitter より) 以上 4 年生
- ここに書かれている 4 年生の自己分析や状況分析は、

授業中の合間に各自走り書きをした程度のものだが、学生の置かれている現状に対する切実な叫びが感じられる。貴重な現代の学生の生の声を記録しておく。

IV 教育実習の問題点と、その改善策について

学年末のレポートの課題として3年生には「今、教育実習指導に求められる改善点と実習生側の問題点」という課題を、4年生には「今、教師という仕事に求める改善点」というレポート課題を課した。力が入ったレポートが集まっているので、短期間ではそれらの内容を分析できず今学期中に報告することは難しい。本報告においては、いくつかの記述をピックアップするにとどめる。

1. 「今、教育実習指導に求められる改善点と実習生側の問題点」3年生の課題から

(1) 学校や教育行政に求めること

- ①教育実習で得られる経験値に大きな差が生じるのを避けるためには教壇に立つ教壇実習の時間数がある程度の制限を設けるなどの規則を定める必要があるのではないか。
- ②国として、実習後における実習生の指導評価方法に関して明確な基準がないことが問題であると思う。実習生に対する現場の教師の権力の大きさが気になる。実習生には提案したり、要求したりする権利は無いのだろうか。評価の基準が明確でないから、指導教員と自由に議論するという形になれないのではないか。
- ③指導教員の経験や知識に当たり外れがあるという状況は仕方がないとしても、最低の行うべきマニュアルや受け入れの方法が欲しい。
- ④教壇実習の前に、学校側と連携をとって何を準備してくるべきかという打ち合わせが大事だと思うが、学校側からの綿密な指示がないことに驚く。教員が忙しいと言う話を聞くが教育実習の受け入れがさらに負担を増加させるということであれば、それを避けるべく何か考える必要があるのではないだろうか。
- ⑤学びの場であるはずなのに、それ以外の雑用が多すぎると感じる。学生は学校の雑用を研修してくるよう感じる。
- ⑥中学も高校も最も忙しい時期に教育実習を迎えるのはなぜなのか。忙しさを経験させたいのか。行事の時期を避けられない理由は何なのか知りたい。
- ⑦教師が自分の後輩を育てるという思いがないのは、自分の勤務校に勤務してもらえないというつながりがないので、まるで熱が入らないのではないだろうか。その点、企業のインターンシップは、自分のところ

に来る後輩となる可能性があるのだから、懇切丁寧にもなるのではないだろうか。学生側の心構えの姿勢も重要だがそれだけではどうにもならない気がする。

- ⑧教員が、学生に「授業は好きにやっていい」と言ったという話があったが、好きにやれる位なら、教育実習はいらない。やはりその学校の教師の指導の指針を示してやらせるべきではないか。ましてや「好きにしていよいよ」と放り出しておいて、実習が終わってから「本当はこうして欲しくなかった」というのは無いのではないか。
- ⑨雑務も仕事の事かもしれないが、やはり教育の現場の仕事のメインは雑務ではない。教育のエッセンスを学びに行くのではないだろうか。ともに教育を語る仲間であるという、せめてその程度には熱い共同体意識が欲しい。
- ⑩教壇実習の授業後の指導の重要性について言及している人があまりおらず、指導教員の熱心さも感じることができなかった。それぞれ個性があるかもしれないけれども、基本的な授業のエッセンスや、それを引き出す学生側の姿勢や気持ちも大事なのだろうが、教師側も回ってきたノルマをこなすという姿勢が強いのではないだろうか。
- ⑪受け入れる側の体制がもっと寛容であれば良いと感じる。

(2) 実習生側の問題点

- ⑫学びの場であるという自覚のもとに、学校現場に参加する機会を有効に使うべく、実習生がもっと果敢に食欲に行動する必要があるのではないか。
- ⑬学びを得る機会を作るという気持ちで、忙しいところを実習生として受け入れてもらっているという謙虚な姿勢も大事だが、実習先の要求に応えるだけではなく、しっかりと自分の要望や課題を持っていくべきではないか。
- ⑭学校側が忙しいと言うことが最大の理由かもしれないが、実習生の側の問題点として、自己主張の少なさが気になる。それは学生側に知識の不足があり、また気になるのはハングリー精神の不在である。
- ⑮学生の教材研究不足や準備不足が消極性の原因かと考える。それを補うには、授業準備がもっとなされていなければならない。
- ⑯学校からの連絡を、来るまで待つのではなく、早いうちから自ら進んで学校と連絡を取ろうとした方がいい。企業のインターンシップは3年生の後半からやっているのだから。

2. 「教師という仕事に求める改善点」(4年生の課題から)

- ①教員不足が問題となっている昨今、その問題の原因は、教育実習にあるかもしれない。教育実習期間にハードワーク経験したり（例えば、3週間の教育実習期間中に40コマの授業を担当するなど）、教育実習の指導教員に厳しい態度をとられたり（例えば、指導教員が実習生の質問を遮るなど）などすれば、教員を目指す実習生が、自分の目標とする職業の見直し（教員という職業形態を見つめ直すなど）をはかり、教員の職業・仕事を選択しなくなる可能性があるのである。
- ②教育実習は、いわば実習生が教員とは如何なるものであるかを実践的に経験する場である。其の、実践的に経験する場は無論、学校という生の教育現場であるために臨場感が漂っており、実習生は必ずといっていいほど緊張する。そんな実習生に対する既存の教育実習システム（コマ数の量、指導教員の指導）は、実習生に「教員の多忙さ・教員の大変さ」などを思い知らせるためのものと化し、より実習生に緊張感をもたらすものとなっていないか。
- ③無論、教育実習において、生半可な気持ちやいい加減な態度は許されないことを忘れてはならないが、実習生が教員の卵という立場に位置していることもまた忘れてはならない。実習生がリラックスして教育実習を受け、さらに教員という職業に興味を持つようになること、これが今の教育実習における当事者の社会的課題であり目標である。
- ④特に私立校の場合、教員の入れ替わりが少ないため、公立校と比べてより閉鎖的になりやすい傾向があるように思われる。それゆえに、教員としての実力が備わっていないような者でさえも、ぬくぬくと仕事を続けることができるのである。学校現場や教師を変えていくためには、こうした閉鎖的な状況を打破し、教員の自主研修の時間を確保し充実させる必要があるのではないか。
- ⑤今日の学校は、大学の進学率や学力テストの結果など、目先の数字だけにとらわれ、単に「知識を吸収し、結果を出す場」に陥っているとと言っても過言ではない。物事の考え方や、他者との関わり方、もっと幅広く言えば、生き抜く力を子供たちに身に着けさせるために、社会や学校そのものの意識を変えていく必要があるだろう。
- ⑥まずは、時間外労働の削減であると考え。テレビや新聞の報道によると、授業準備や生徒指導に部活動指導が加わることで、十分な休日を確保できないことが問題視されている。母校の公立中学校へ教育実習に行った時、20時を越えても学校に残っている教員がほとんどであり、この問題の深刻さを感じた。私の中学時代は、月曜日以外は朝部活を行っていた。

だが、現在は「睡眠不足による成長の弊害を防ぐ」という長野県の方針で、朝部活は行っていなかった。この場合は、生徒の視点での政策ではあるが、部活の顧問の教員にとっても時間にゆとりができ、時間外労働の削減に繋がるだろう。このように、生徒と教師共に良い環境へとつながる政策である。

- ⑦教師という職業が今後より良くなるには「教師とは何か」をはっきりさせる必要があると考える。教師には①授業②学級活動③部活動④行事⑤地域とのつながり⑥保護者替わりとここにあげただけでも多種多様な仕事がある。しかも、一つ一つの手間は増えている。例えば、通知表では道德の欄が増えたり、データ保護の関係上持ち帰りができなかつたりと形式に過ぎない事務上の問題でより手間隙がかかってしまっている。そんな状況でいい授業をしたり一人ひとりにきめ細かく指導したりすることはできないと思う。時間も精神的ゆとりも足りないのが今の学校現場の現状なのではないのかと思う。それでいて、給料も労働の手間隙を考えると決して高くはない。これでは、ブラックと言われるのも志望者が減るのも当然のことである。
- ⑧本来、教師という職は「教え導く師」として尊敬され、憧れるべきものだったはずだ。教師という職が再び魅力的になるには「教師とは何か」をはっきりさせていく必要がある。この観点で社会的条件、担い手側に求められることを考えていきたい。社会的条件としては、一人当たりの先生の仕事量に制限をかけるべきと考える。一人の先生が担当するHRの人数限度を今より低くし、教科で担当する生徒数も制限すべきだ。人ひとりが一度に対応できる人数は限りがある。それ以上に対応するとなるときめ細かい指導が難しくなり、先生の精神的負担も大きくなる。「生徒のため」という免罪符の元、過重な負担がかかってしまう。そのため、今のHR40人前後から20人くらいまで減らし、一人ひとりの負担を減らす社会の仕組みを作る必要がある。
- ⑨授業以外の仕事、例えば部活などをコーチに頼むなどして減らしていく必要がある。外部ができること、外部と協力する方が効率の良いことをどんどん学校外に広げる必要がある。部活は技術向上だけではなく、礼儀や団体行動を教える場でもあるが、部活の顧問は担任以外の身近な先生となり、担任に相談しにくいことも相談出来るというメリットもある。しかし、やりたくない部活の仕事をするばかりにやりたい教科勉強やHR対応ができていない先生もいるのが現状だ。そのギャップをなくすために、部活の顧問は学内で公募にし、あとは外部に頼む形でもいいのではないかと思う。部活動上での責任も学校

が負いつつ、コーチが顧問のように活動できる事務システムをつくる必要があるのではないかと。

- ⑩学校事務、または教務助手と教師の人数の増加は必須。今日、学校に教育を任せず、勉強は塾などに通うという家庭も珍しくない。しかし、このままでは教育格差は広がるばかりだ。公的な教育にお金と人員をかけることで改善可能だと思う。
- ⑪教師が働きにくいのは給料というより環境にあると思う。社会的状況は規制や外部委託がしやすい仕組みをつくることで変わるのではないかと。
- ⑫「教師の業務の多さ」は「教育現場の人手不足」や「公立と私立の違い」、「教科への研究時間確保の困難さ」にもつながる問題である。この複数の問題点については学校だけで解決することは難しく、社会全体が考えなければならないことである。教育にかける公費が低く、私費負担は高い状態は、社会や国が教育に無関心になっていくばかりである。また事後指導の際も、明らかに一部の私立学校の方が公立の学校より、教育実習の仕組みが整っているという声が三年生から挙がっていた。確かに金銭的にゆとりがある私立学校は教員を多く雇い、教員の業務を分割し研究時間も確保することが出来る。公立学校は学校だけでそのような環境に出来るのだろうか。この公立と私立の教育実習受け入れの格差について、実習校だけでなく教育実習を体験した実習生や指導教員も社会に向けて声をあげ、体制を変えていくことが必要である。

V まとめと提言

ここまで、教育実習の受け入れ側の学校体制と現状、また、教育実習を体験してきた直後の学生たちの声、これから実習を体験する予定の学生たちの要望と覚悟を生々の声として列挙してみた。今回は、問題点にのみ焦点を当てて論考したのだが、もちろん、教育実習の中で、生徒との豊かで楽しい経験も、指導教員などから心に染みる意義のある指導を受けたという報告もある。そして、ここに列挙した問題意識や提言は、今更新しいものではない。筆者は、機会があれば、法政大学の卒業生のみならず、首都圏の中学校、高等学校で教壇に立っている現場の教師とも、交流し、研究会を開催しているので、どれも現場の教師の様子から感じ取っていたことだった。だが、現場に入ってから気づくのではなく、すでに3週間の教育実習の体験から、これほどまでに、全国レベルで広がる厳しい現場の状況を目の当たりにしてくるとすれば、そこに何か早急に、抜本的に変革しなければならないものがあると考えざるべきであろう。

部活指導や教務などの書類のパソコン処理、家庭の教育力の低下による生徒の問題行動などをカバーするのは、現役の教師がやらなくても、適任の人材が世の中にはいくらでも眠っている。退職後の企業人やスポーツ界の元選手やコーチ、退職教員や公務員など、年金を減らされない程度に貴重な職能を利用し、力を発揮したいと考えている人材は周囲にも大勢いる。ジャンルごとに公募して大いに活用し、教師が本来の仕事に専念できるようなシステム作りが早急に待たれる。

教員の人材確保、資質の向上のために、まずは、労働時間の縮小、教師の仕事とは思えない雑務の軽減、教材研究や指導法についてのブラッシュアップの機会の保証、そして、なにより「教育実習指導における全国レベルでの共通ガイドライン」の作成は必須である。